12月17日：メラメラ・ビートアップ Part.2

◇

チームメンバーは全部で十五人。パーティ参加条件は一回以上レイドモンスター「焠がる大赤翅」とのエンカウント経験がある事………要するに、一回以上焠がる大赤翅に灰にされたことがある者だ。

少なくとも考えなしに焠がる大赤翅に殴りかからない程度には攻略への理解があり、なおかつ焠がる大赤翅の行動パターンを覚えている者達。野良以上固定未満であっても最低限の連携が出来れば上等と集まった面々は、土砂降りの中を突き進みながら死火山の山頂で確かに輝く灼熱の光を見た。

「目標視認！ なんか………いや、燃えてることには燃えてるけど初期状態よりは明らかに萎んでる！」

「ここまで土砂降りにして効果無かったら流石に公式にお気持ちメールだって！ じゃあ全員打合せ通りに！」

このパーティの発起人であり、リーダー（どちらかというと音頭取り）であるオイカッツォの掛け声で十五人の討伐隊達が三人一組の五パーティに分裂する。

「ケ、じゃなかったカッツォ！ ひどい雨だけどこれ本当にいける！？」

「これが前提(・・)なんだよペッパー！ この雨が無いと焠がる大赤翅には誰も干渉できない！！」

オイカッツォと共に行動するプレイヤーの一人。オイカッツォが知る中身(リアル)と比べると五、六歳ほど年上の女性アバターを使うプレイヤー「ペッパー・カルダモン」が土砂降りを浴びながら叫ぶ言葉にオイカッツォも負けじと大声で返す。

気を抜けば足を取られて転倒してしまいそうなほどに雨が斜面を流れ落ちる死火山の大地を踏みしめ、水しぶきを上げながら五組のチームは円を描くように焠がる大赤翅を包囲する。

当然ながらオイカッツォ達以外にも突然のピンポイント大雨に戸惑いながらも雨天決行と焠がる大赤翅に挑む他のプレイヤーもいるが、同じパーティに属するプレイヤーのネーム表記はそうではないものと比較して判別しやすくなるシステムを利用してオイカッツォ達は事前の打ち合わせ通りにそれ(・・)を各々が握りしめながらその瞬間を待つ。

『Vooooooooooooooooooooooooob………！』

焠がる大赤翅の身体は人類種や他のモンスターとは明確に異なり、物質ではない。生きる炎、思考するエネルギー、それこそが焠がる大赤翅の本質。白き神の血族たる”赤い”マナ粒子はしかしエネルギーそのものが肉体であるからこそ、ある意味では肉持つ生物以上に物理法則による影響を受ける。

モーション名：蒸気膨張波動(きりのしんりゃく)。

水や氷……焠がる大赤翅の温度を低下させる攻撃を受けた際に自らの身体(エネルギー)を高温の蒸気に変質させて受けたダメージの総合計値分の蒸気衝撃波を自身を中心とした周囲に撒き散らす連帯責任型(・・・・・)カウンター技である。

だがこのカウンター、実はオート発動ではなく任意発動なのだ。ダメージに反応したエネルギーの性質変化をドーム状に放射するまでの一連の現象は焠がる大赤翅自身が制御しているものであり、裏を返せば蒸気膨張波動の本質は焠がる大赤翅自身の肉体が変質とそれに伴った膨張による弾き飛ばしだ。

物凄くかみ砕くと………「焠がる大赤翅が物凄い勢いで脱皮して吹き飛んだ皮にぶつかった衝撃で周りが吹っ飛んでいる」とでも言うべきか。

要するに、蒸気膨張波動は何度も何度も………それこそ、やまない大雨のような大質量の液体による温度低下に晒され続ける度に発動し続ければ、最後には焠がる大赤翅の肉体全てが蒸気に変換されて消滅してしまうことになる。

あるいは焠がる大赤翅が自爆”だけ”を目的としていたならば、むしろ好都合とばかりに死火山そのものをスプーンでくりぬくようにぶっ飛ばす(・・・・・)ことも可能だ。だが焠がる大赤翅の使命はエネルギーの生産と不足の補完だ、思考するエネルギー体であるからこそ「自爆は良くない」と判断。

果たして人類たちの取った行動によって生じた大雨(とおりあめ)に打たれた焠がる大赤翅は自身の蒸気化を自らの思考で中断し、雨に対する「防御形態」をとったのだった。

「なんか………滑ってる(・・・・)？」

降り注ぐ雨に怨念などないはずなのだが、心なしか焠がる大赤翅にピンポイントでもはや滝のような雨が降り注いでいるが、その雨粒は明らかにおかしい軌道を描いている。

蒸発するでもなく、焠がる大赤翅に触れるわけでもなく……例えるならそう、まるでガラス細工の表面を伝って下に落ちていくように。サードレマを超遠距離炎(砲)撃した時とは比べ物にならない程小さな……しかし豪雨ですら隠し切れないほどの真紅の翅、その表面を水が滑り落ちているのだ。

「どうするの！？ もう始める！！？」

「いや………一発、一発だけなにか別の攻撃を当てよう。あの「膜」が妙に気になる」

オイカッツォ達が持ち込んだ「対策装備」は焠がる大赤翅が「灼熱のエネルギー体」であることが大前提だ。もしオイカッツォの予想が正しければ焠がる大赤翅の表面に張られた「膜」……否、あれは──────

「全員に通達。大赤翅の表面が怪しいので一発通常攻撃をぶつける。総攻撃待て、繰り返す総攻撃待て……」

「───俺に任せときな」

と、オイカッツォが全員がベヒーモスで入手したインカムを通して指示を出す中………オイカッツォとペッパー・カルダモンとスリーマンセルを組んでいたもう一人が一歩踏み出す。

「あ、ちょっと」

「ま、割と無理言ってついてきたからな………ちったぁお役立ちを見せなきゃな。なぁに、流石に直接殴りに行くほど無鉄砲じゃあねぇ」

インベントリから投擲用の礫(アイテム)を取り出し、渾身の力を込めて振りかぶるその姿は…………あまりにも小さく、頼りない。だがベヒーモスを攻略する中で出会ったその人物──────

知り合い(半裸の変態)の知り合い(オギャるマン)を名乗る、見た目五歳児にしか見えないれっきとしたプレイヤーが見た目とは真逆のまるで筋骨隆々の闘士が如き力を秘めていることをオイカッツォ達は知っている。

「おるるぅああああ！！」

母性に飢え過ぎて狂った成れの果て、肉体年齢を限界まで下げ続けて行きついた到達点。

ママの不安を取り除くため、「親孝行」を掲げてレイドモンスターの討伐に参加を表明した男……エターナルゼロ。

男が投げた礫は、その姿からは想像もつかない程の剛速球となって不気味な状態の焠がる大赤翅へと推進する。

ママの不安は俺が祓う。

オイカッツォはサンラクの正気を疑った。でもサンラク君、基本的に変態性に起因する行為を否定はしても変態性そのものはあんまり否定しないから変態が寄ってくる魔性属性持ってるところあるから…………

鯖癌→スぺクリ→幕末→その他もろもろ、のコンボが謎の寛容性を培ってしまった

この流れで宣伝するのどうなの？って感じですがいよいよコミカライズ版シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～の5巻が発売されます！

表紙は墓守のウェザエモン！大魔導師不二先生の超絶技巧によってボスとしての風格とキャラクターとしての悲哀が文字で語らずとも絵で伝わってくる最強の表紙です。

特装版に付属する小冊子は硬梨菜が記憶してる限りでは割と前代未聞な「特装版コンテンツで上下分割」というトンチキムーブをやらかしたTRPG番外編の後半です！！ 正直「あの………中編とか………」とは言い出せなかったです！ 作者の良心回路はまだ死んでないので！！

しかも、さらに、なんと、単行本には原作：大森藤ノ先生、漫画：青井聖先生のもはやメドローアタッグと言っていい「杖と剣のウィストリア」とのコラボSSがついています。しかも書いたの硬梨菜じゃないですからね、大森先生ですからね。マジ？ 未だに夢かどうか半々ってところですね……

気になる発売日は8月17日、外はクソ熱い（暑いではなく熱い）しそれを我慢しようにもご時世がご時世なので皆様、クーラーの利いた部屋で楽しむコンテンツとして拙作は如何でしょうか？

5巻は収録内容的に激熱展開なので皆さんの家のクーラーが破損したとしても責任は取りません。修理業者を呼んでください